立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２０１２年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	日本文学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科日本文学専攻 博士課程後期課程４年	後藤　隆基	印
指導教員	所属･職名	氏　名	
	文学部教授	藤井　淑禎	印
自然・人文・社会の別	自然　・　[人文]　・　社会	**個人・共同の別**	[個人]　・　共同　　名
研究課題名	地域文化における近現代演劇の研究―京都・大阪・東京を中心に―		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科・日本文学専攻 博士課程後期課程４年	後藤　隆基	
研究期間	2012　年度		
研究経費	200　千円（実績額又は執行額）		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、京都・大阪・東京を中心とした、地域文化における近現代演劇の検討を目的とする。従来の近代演劇研究は、東京の事象を中心に行なわれてきたが、京都および大阪を対象とすることで、新たな視座の提示をめざす。第一に、明治 30 年代半ば、京都（新京極）の行政・教育・興行諸機関の協働で組織された「京都演劇改良会」を俎上に載せ、同会成立期の理念やその基盤となる京都劇壇・文壇ネットワークを考察する。第二に、同時代の大阪の演劇状況を明らかにするため、海外巡業から帰国した川上音二郎の帰朝紀念公演（明治 34 年 1 月、大阪朝日座）をとりあげる。また視点を現代の東京に転じ、とくに都市文化における地域性と演劇の結びつきについて検討を試みる。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　近代日本演劇　〕〔　近代日本文学　〕〔　地域文化　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究課題の成果は、下記のとおりである。

（１）京都演劇改良会と高安月郊を中心とする京都劇壇・文壇ネットワーク

明治 35 年（1902）に京都で組織された「京都演劇改良会」は、当時「大阪千日前、東京浅草と並び称される快楽境」（『廿世紀之京都　天之巻』京都出版協会編・発行、1908 年）といわれた新京極地域の行政・教育・興行諸機関の協働によって形成され、高安月郊の新脚本を支柱とした、新俳優・福井茂兵衛一座の全 3 回の公演活動が、その実質的な成果と認知されてきた。

同会については、秋庭太郎『日本新劇史　上巻』（理想社、1955 年）、小櫃万津男「『京都演劇改良会』の研究」（『日本演劇学会紀要』18 号、1979 年）、森西真弓『上方芸能事典』（岩波書店、2008 年）などの先行研究があり、本研究代表者は、「高安月郊と京都演劇改良会――第三回改良演劇の実体と、その挫折――」（『演劇学論集　日本演劇学会紀要』第 53 号、2011 年）を発表している。

本研究では、京都演劇改良会の発会（4 月）から第 1 回公演（9 月）までの期間を対象に、同会成立期の理念と実際の活動状況、その基盤となる京都劇壇・文壇ネットワークについて調査・考察を行なった。

従来、京都演劇改良会に関する先行研究では、新俳優や局外の文学者、新進の興行者である松竹合名会社の参加という側面が強調されてきたが、同時代紙誌を精査すると、当初は、実川正若や市川瀧三郎ら当地の歌舞伎俳優も評議員に名を列ねていたことがわかる。同会は、一時「新京極演劇改良会」の名称で呼ばれていたものの、発会式を前に、会長の高木文平が「新京極以外の各座をも改良しやう」（「楽屋風呂」『京都日出新聞』4 月 18 日）と気を吐いたという姿勢に鑑みれば、地域的な観点のみならず、新演劇と歌舞伎を包含する形で演劇改良が企図されたはずだ。しかし、後世の記録や研究では、そうした多義的な可能性は閑却され、ひとつの結果としての新演劇――福井茂兵衛一座による新脚本上演だけが焦点化されてきた。そのことにまず注意を払わねばならない。

福井茂兵衛が改良運動の実践者と位置づけられる過程を検討すると、発会直後の改良会は、俳優や劇場に対する厳酷な課税、役員による観劇会や会議をくり返すばかりで具体的な行動を起こさず、やがて演劇現場からの反発を招く事態に陥った。そうした動きの中で、福井は、所属していた明治座の仕打・大谷竹次郎や、同僚の俳優・静間小次郎との衝突から同座を脱退し、独自の「改良演劇」を四条南座で実践するに至る。その公演活動の支柱となって新脚本を提供し、同時に世論の〈新しい作者の登場〉という要請を担ったのが、高安月郊であった。

月郊は当初、京都演劇改良会のメンバーに名を連ねてはいなかったが、同会の中心人物である京都帝国大学図書館長で英文学者の島華水との交遊を通じて、参画に至ったと思しい。月郊は、華水経由で、大谷竹次郎から脚本執筆の依頼を受けたものの、その脚本「月照」は、一旦上演を保留とされてしまう。そこで、明治座を脱退し、急進的な姿勢をとった福井茂兵衛が同作の上演に踏み切ることとなる。

結果的に、福井一座による月郊の新脚本上演は好評を以て迎えられ、改良会も以後積極的な後援を行なう。福井のやり方は、自ら「漸進主義」を唱える静間との距離を顕在化した。しかし、理論ばかりが先立ち、実行が伴わぬまま時が過ぎてきた演劇改良の行き詰まりを超克するためには、福井の急進性が必要であり、それに呼応した月郊との協働が、京都の演劇改良運動を力強く推進したのである。そして月郊自身、改良会を経由した福井との邂逅によって、初めて演劇現場に携わり、自作が上演されることとなる。福井一座の第 1 回改良演劇は、劇作家高安月郊の実質的な出発でもあった。

上記の成果の一部は、「京都演劇改良会再考――高安月郊と明治期京都劇壇の一断面」（仮題、未発表）としてまとめており、2013 年度の発表を予定している。

また、高安月郊の事蹟等に関する資料調査として、新聞・雑誌記事を収集するとともに、各図書館所蔵・古書店で購入した書簡等の翻刻にも着手している。

（２）明治 30 年代における大阪の演劇改良と川上音二郎

新京極で京都演劇改良会が成立した明治 35 年、大阪でも類似した演劇改良運動が起こり、5 月に大阪演劇協会が発会式を挙行した。この団体はこれまでほとんど注目されてこなかったが、大阪劇壇、ひいては京都との関係も含めた近代上方演劇の状況を考える上で、看過できない意義をもっている。

本研究では、その前段階となる時期に着目した。明治 34 年（1901）1 月、1900 年のパリ万博公演などを成功させた川上音二郎は、海外巡業（第一次、1898～1900）から帰国すると、彼の後援者や各劇場の興行主の要請で、半ば急造の帰朝紀念公演を行なうこととなる。とはいえ、この公演は、全国の新俳優たちを総動員した「新演劇大合同」として大きな話題を呼んだのである。

研究成果の概要　つづき

公演の実現に至る経緯を、同時代紙誌によって追いかけると、音二郎自身の思惑をこえた周囲の期待が窺え、また一連の動向を見渡すと、日程や劇場の確保など、場当たり的に制作が進められており、また全国各地の新俳優が参集することも相俟って、万事の調整は非常な困難が伴ったことが推察される。

そんな慌しい公演準備の最中、音二郎は各所から招かれて、欧米での体験談を披露していた。一例として注目すべきは、大阪の文学者の団体である文学同好会、大阪学会、浪花文芸会が催した新年会である。この集まりには、川上音二郎と貞奴を主賓に、大阪府書記官の西澤正太郎、同参事官の安河内麻吉以下市内各区長、府市会議員、弁護士、企業家、銀行頭取、私立病院長、新聞社主、私立学校長、出版社長、興行座主、新俳優、狂言作者、文学者、新聞雑誌記者など、220 余名が参会した。

1 月 15 日付『大阪朝日新聞』記事「文芸同好会の新年会」によれば、全体に音二郎への期待を通して「大阪紳士の演劇思想を発揚するの好機会を与へたる者」で、この集まりは「各種の紳士を一堂に会し、以て将来劇と文学との調和を謀るの端を啓きたるは、実に是れ大阪文学界空前の現象と云ざる可らず」と位置づけられたのである。まさに「有力なる市民と文学界、劇界の人々のかく会合したるは未曾有の事にして近来稀なる盛会」だった。

行政・教育・医療・金融諸機関、企業や財閥などの後援を得て、出版ジャーナリズムとの関係も緊密化し、文壇を巻きこんだ「劇と文学との調和」をめざしたこの会が、角田浩々歌客、平尾不孤らを中心に開催され、さらに薄田泣菫や金尾種次郎らが列席していたことに鑑みれば、雑誌『小天地』（明治 33 年 10 月創刊）を軸とした大阪文壇の交友圏が、その周辺には確と存在している。そうした会合に、音二郎は主賓として招かれ、饗応を受けたのである。劇壇衰微の現況を打破すべく、音二郎の帰朝を機に大阪・朝日座で新演劇大合同が企図されたわけだが、同時に彼は、劇壇を外部の社会と接続する役割も担うことになる。音二郎にとっては従来にない、新たなネットワークが築かれる可能性があった。大阪における演劇改良の機運は、同時代の文壇と呼応しながら高まりつつあったと見てよいだろう。

上記の点については、「明治三十四年の川上音二郎・序説――大阪朝日座における新演劇大合同の周辺」（『立教大学日本文学』第 108 号、2012 年）と「川上音二郎と竹越與三郎」（『大衆文化』第 8 号、2013 年）を発表している。

（３）東京における演劇と地域文化――池袋を中心に

2011 年に、立教大学と東京芸術劇場が連携協定を締結し、本研究代表者は、当時 RA として勤務していた ESD 研究センター（現・ESD 研究所）において、その記念シンポジウムを企画・制作した。また、2012 年に超党派の議員立法で「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律（劇場法）」が成立、施行された。そうした現状をふまえ、本研究では、東京という都市――とくに、自身が拠って立つ池袋をひとつの地域と考え、その中で、演劇がどのように地域文化と結びつきうるのかを考察の対象とした。池袋には、大小多くの劇場があり、1948 年創立の舞台芸術学院などもある。併せて、池袋という地域文化全体を総合的に扱っていく必要がある。今年度は、具体的な実践には至らなかったものの、劇場関係者へのヒアリング等を行ない、協働の可能性について検討することができた。

そうした調査の過程で、月刊誌『東京人』から依頼を受け、特集「豊島区を楽しむ本」（第 318 号、2012 年 11 月増刊）に、「池袋のまちと、立教大学」を寄稿できたことは、地域と大学の関係性を考えていく上で、貴重な機会であった。

なお、本研究とは直接的な関連は薄いが、現代演劇をとりあげた作品論として、「井上ひさし「天保十二年のシェイクスピア」における〈性〉の考察」（『演劇学論集　日本演劇学会紀要』第 56 号、2013 年刊行予定）を執筆した。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①雑誌論文

後藤隆基「明治三十四年の川上音二郎・序説――大阪朝日座における新演劇大合同の周辺」（『立教大学日本文学』第 108 号、2012 年、pp.22-33）
同「池袋のまちと、立教大学」（『東京人』第 318 号、2012 年、pp.84-89）
同「川上音二郎と竹越與三郎」（『大衆文化』第 8 号、2013 年、pp.21-33）
同「井上ひさし「天保十二年のシェイクスピア」における〈性〉の考察」（『演劇学論集　日本演劇学会紀要』第 56 号、2013 年刊行予定）
同「京都演劇改良会再考――高安月郊と明治期京都劇壇の一断面」（仮題、未発表）